

# 介護福祉実践におけるソーシャルワーク

堂元京子

先日、懐かしい恩師である名倉道隆先生からのお便りに、11年前、大学院生だった私が、先生の介護福祉原論の授業で提出したレポートのコピーと一緒に入っていた。「介護福祉の実践におけるソーシャルワークの働き」をテーマに出題されたものである。

名倉先生は元々京都大学の医学博士でありながら、時を経て、僧侶の資格も、介護福祉士の資格も取得されて、大学教授を引退され、80才を超えた今でも、高齢者施設でボランティアをされている。

当時、大学院の「介護福祉原論」も担当されていた。

そして、何よりも、浜松成年後見センターの理念は、この名倉先生からいただいた言葉である。

私の修士論文のテーマは、『身上監護のあり方』だった。論文発表の時、前に座っていた先生が振り向いて、“後見活動は、社会福祉の視座に立つ人権尊重の支援である”と書いたメモを、そっと私に手渡してくださった。法人を設立する2年前である。

私は、とても感動し、しっかりと心に刻んだ。

そして、この言葉は今も私達、浜松成年後見センターの大切な理念となっている。

今改めて、11年前、先生の授業で提出したレポートを読み返してみると、今も変わらない、チーム支援と、そこに息づくものの大切さを述べていて、初心に返ったような気持ちになった。これを読んでくださる皆さんとも共有できたら嬉しい。

////////////////////////////////////

## 介護福祉の実践におけるソーシャルワークの働き

堂元京子

介護福祉の実践に、ソーシャルワーク概念を位置付けることは、実践に厚みと深さを増し、協働すべき隣接領域とののりしろを広げ、チームとしてより深く結び合うことができ、対等な協働関係を築き、よりよい実践に繋がるものと考えます。

### 1 介護福祉とは

まず介護福祉を定義するにあたり、それを実践する者として「介護福祉士」が国家資格として位置付けられていることから、その業務を実践と考えると以下のように定められている。

「介護福祉士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき心身の状況に応じた介護を行い、並びにその者及びその介護者に対し

て介護に関する指導を行うことを業とする者をいう。」

では、『介護とは?』となると、介護論争と言われるほど様々な意見が錯綜している昨今で、どれも間違いではないが、言い切るのも難しい。さらに『介護観』となると、複雑多様化は必然的とまで言われている。

そこで、ここでは一応“専門職が行う介護”として考えることとし、一般的にコンセンサスが得られる大枠として、ざっくりと“介抱し、お世話する”ことからのケアワーク(介護技術)をコアにして『生活を支援する、その人らしく社会生活を営めるように支援を行うこと』に留める。そしてこれは QOL を考えることに繋がっている。

## 2 ソーシャルワークとの接面

QOL の考え方は、元々社会経済学分野で、経済発展により生活環境の悪化が問題となり、物質的な豊さだけではなく心の豊かさを求めるものとして生まれた。その後医療分野で認識され、特にターミナルケアにおいて、心身の苦痛の緩和、命の尊厳の重視に繋がり、近年福祉分野においても使われるようになり、生活の質、人生の質を考える指標となっている。そして、これはソーシャルワーカーが業務とするソーシャルワークの大切な指標の一つでもある。

このように介護福祉を考えていくと果てしなく広がり、隣接領域にオーバーラップしていくかに見える。しかしながら、現実の実践(業務)の場においてはマンパワーと時間は限られており、ゆとりのある環境ではないため、現実に即して考えると、介護業務として優先度の高いものから行われ、利用者本人に必要な支援全体は、多職種でチームとして実現されればよいので、業務分担される。その為、いかに情報を共有して、チームが同じ目標に向かうことができるかということが重要になる。このような関係性を結んでいくこともソーシャルワークである。

このように考えていくと、チーム全体の共通基盤として流れているもの、繋ぐものそのものがソーシャルワークであると言えるのではないか。

## 3.介護福祉実践の中にみるソーシャルワークとは

施設でも在宅においても、介護職に求められる優先業務は、食事介助、排泄介助、入浴介助、移乗、移動介助等生活に密着した直接介護(技術)である。そこにソーシャルワーク的な要素を織り込んでいくには、アセスメントからニーズを見出ししていく思考プロセスを丁寧に行うことである。その思考プロセス(介護過程)そのものにもソーシャルワーク的発想を共有している。例えば ICF 概念もそうである。そして熟練した介護技術を提供する上で、言語的、非言語的コミュニケーションをとりながら、今、利用者が何を望み欲しているかを即座に感じ取りながら、その場で適切な自立支援に根差した介護を、さりげなく提供していくことである。又、より専門的ニーズを感じ取った場合、自分で抱え込まず、直ぐにチームに繋ぎ、専門的援助が受けられるようにするマネジメント的発想もソーシャルワークである。

又、日常生活の中で起こる利用者間のトラブルに介入していく場合もソーシャルワーク技術が必要である。これらは、介護福祉実践の中にソーシャルワークが上手く織り込まれている状態であり、良い実践には必要不可欠であり、介護福祉士の養成課程に、「社会福祉援助技術」として位置付けられてきた所以である。

## 4 岡村理論から見る社会福祉援助実践

昨今チームとして実践活動を行う中で、職種を超えて、阿吽の呼吸とでもいうような息の合う仕事ができる人たちと出会うことがある。

介護現場で利用者の支援を協同する時、あるいはケアマネとして地域で利用者支援を協同する場等においてである、

この一体感というかフィット感は何なのだろうと長く考えていたのだが、岡村重夫の理論である社会福祉固有の『社会関係』を捉えるにあたり、『主体的側面からみる視点』を共有しているのではないかと思いついた。

立ち位置が利用者とぴったり寄り添う時、そして、そこから制度面まで見渡す時、ソーシャルワーク実践としての方向性が、ぶれずに同方向に定まるのではないか。それで、気持ちの良いチームワークが可能となるのではないかと考える。ここに至る人達が皆、岡村理論を意識しているとは考えられないが、それぞれの資質に職業経験、学び、あるいは人生経験が伴って醸成されて、岡村理論と重なったのであろうか。

もう一つ、介護福祉実践を岡村理論の「援助関係」の『主体性の原理』から見てみたい。

岡村は、生活困難の当事者が自分の力で問題を解決するように援助するのが主体性の原理だと述べている。これは、我々の行っている利用者一人ひとりの状態に合わせたエンパワメント支援と同義語だと考える。

介護福祉実践の中では、要介護状態にある利用者一人ひとりに対して、日々の介護サービス提供の方法においても、綿密なアセスメントのもとに実践され、又、生活場面ごとにおける関わり、言語的・非言語的コミュニケーションを通じて、利用者がその人らしく自立(自律)して生活できるように援助(支援)していくことである。その日々の生活の積み重ねの中で、ラポールが生まれ、関係性が強まっていく。そして、その関係性が継続維持されている場の環境は、結果として利用者に安定・安心感を提供し、そこではじめて様々な変化が起こってくるのである。

それは、希望もなく虚ろであった利用者が、前を向いて初めて踏み出す一歩かもしれないし、パーソナリティの変容と言われるものかもしれない。それぞれの利用者がその人らしい形で何かしらの動きを見せ始めるのである。

介護福祉実践においては、まさにその時を共有するのである。ある意味では、そこがスタート時点でもあることを、一番身近にいる介護福祉実践者は十分に理解して関わってほしい。そこからの支援の仕方、その変化は加速するか、減速してしまうか、そこで止まってしまうか……と大きく変わってしまうからである。そこまでを全て含めて、エンパワメント支援と考えたい。

## 5 まとめ

繰り返しになるが、私は常に、一人の要援護者の支援には、複数に専門職の人たちが、チームを形成し関わっていく必要があると考えている。チームワークが良ければよいほど、包括的で良い生活支援ができると思う。従って、チームの一員としての役割分担がある。ここで述べてきた介護福祉実践者は、ケアワーカーとしてチームの一員である。利用者の一番身近なところで直接援助を提供しながら生活を見ていくのである。身近な環境整備と身体介護・生活援助が主たる業務である。だから、まずその質が問われる。

次に、その直接的な関わりの中でしか気づかない、その距離感でしか知りえない大切な情報を、きちんと把握し、チームに還元する役割がある。よりよいアセスメントのために必要不可欠である。そして、ケアカンファレンスにおいて、支援のどのパーツを自分が担うのかを自覚し、更に、他職種からの情報を再度自分の業務に還元することである。

これはモニタリング機能として繰り返され、チームとしてよりよい実践に繋がる。

このようなチームとしての支援活動は、それ自身がまさしくソーシャルワークではないだろうか。

従って、介護福祉の実践にとって、ソーシャルワークは様々な場面で活用されているものであり、又、包括的なチーム支援から見ると、介護福祉実践はソーシャルワークの一翼を担うものであると考える。